



< 3月号 >

朝三中だより

<目指す学校像> 一人一人が輝き 感動と笑顔あふれる学校

朝霞市立朝霞第三中学校
令和6年2月21日発行

〒 351-0023
朝霞市溝沼 1043-1
TEL 048-464-7575
FAX 048-467-4742

校長 嶋 徹

春らしい温かな日が増えて、梅の開花がテレビ等でも伝えられています。令和5年度は残り約1か月となり、学校では今年度の総括と次年度の準備を進めています。学校評価では、保護者の皆様には4段階の数値による評価に加えて、自由記述で、ご意見ご質問等を多数いただきました。ご協力ありがとうございました。自由記述については、過日の連絡メールでお知らせしたURLに



2年スキー林間学校 1/31~2/2

いただいたご意見等と学校からの回答を掲載しましたので、ご確認ください。

人間的な幅から生まれる自分の音色 — 元ベルリンフィル首席 ブラッハーさんの教育論 —

コリヤ・ブラッハーさんは昨年11月、レクチャーコンサートを開き、練習量ありきの教育法に疑問を投げかけた世界的なバイオリン奏者です。水島愛子さんは長年、ドイツの名門オーケストラで活動し、日本とドイツで後進の指導に当たっているバイオリン奏者です。その2人が日本の練習（教育）について話をした内容が、朝日新聞（R6.2.14）に掲載されました。以下は、その一部です。ご家庭の状況を見つめる参考にしてください。

ドイツと似ている 親が負荷かけすぎ

練習量を求める考えについてブラッハーさんは、「日本の状況はドイツと似ていますね。練習量について、親がプレッシャーを与えすぎているように思う。」と語る。作曲家だったブラッハーさんの父はいつも、「練習はやりすぎないように。でもしっかりやるんだよ。」と話をしていた。「練習をしすぎて成功しなかった人がたくさんいる。」とも言った。

水島さんは幼少時に、世界的なスズキ・メソッドの創始者鈴木鎮一さんに師事し、鈴木さんは常々「うまくなる練習をしなさい。」と話し、「練習の質にこだわっていた。」と言います。「できないから練習するのに、日本の子どもたちは間違えてはいけないという恐怖心を感じている。」「日本では自分の子が何時間練習したと自慢する親がすごく多い。集中力が切れていると感じたら、親は子に練習をやめさせるべきです。」と話しました。

運動・料理・映画……普通の生活が大切

ブラッハーさんは、さまざまな文化、芸術に触れ、スポーツで体を動かすことの大切さも指摘した。「演奏家は身体を使う運動家（アスリート）なのです。同時に頭を使う知識人で、演奏するときには役者でもある。」

水島さんはブラッハーさんの話から、「音楽家が普通の生活をするための大切さ」を改めて感じたと言う。「運動もするし、料理や映画演劇に興味を持ち、美術館にも行く。人間的な幅がなければ音楽も狭くなる。」「欧州の優れたバイオリニストは、楽譜から音のバランスや大事な旋律を読む力に富み、自分にしかない音色を持っている。」と指摘する。「コンクールで優勝しても研鑽を続ける人もいる。コンクールの上位入賞者をもてはやし、人間的に未成熟なまま売り出す日本の風潮は、すごく危険なことだと思います。」「日本の音大は、ソロになる教育は充実していても、アンサンブル（合奏）をしっかりと学べる場所は少ない。鈴木先生は合奏を大切にしていました。競い合うのではなく、聴き合いながら弾く。落ちこぼれも作らない。ソリストでなく、まず人間として素晴らしい人を育てる。そんな教育法でした。」

いい音楽を奏でるには、幅広い教養と関心を持ち、優れた人間性を持つことが必要ということなのだろう。